

## 野辺の民間信仰・路傍の神々Ⅳ

村越 信子

(平成 14 年 10 月 3 日受理)

### Images of Popular Belief in the Open Field: Wayside gods and Goddesses Ⅳ

MURAKOSHI, Nobuko

(Received on October 3, 2002)

キーワード：ビルトシュトック、カルヴェール、カルヴァリオ、路傍の十字架像

Key words : Bildstöck, Calvaire, Calvario, Wayside cross.

#### 1. はじめに

「道」は人間の最もすばらしい創造物の一つである。古代より人間と共に発展し、人々を助け、その生活領域を拡大し、他の人々の生活領域とを目に見える形で結び、人間に移動のみならず、物資の輸送、情報の伝達という大きな役割をも果たしてきたのである。

この「道」は人々の生活に欠くことのできない大切な機能である。その「道」は神聖なものとして、道端に祭壇を設け、道の十字路に、分岐に、橋の袂に人々が様々な事柄を祈願して安置したと思われる色々な型（仮称・十字架型、祠型、灯籠型、巣箱型）の建造物を目にする。それらは、ビルトシュトック（独語）カルヴェール（仏語）カルヴァリオ（西語）などと呼ばれている。わが国における“道祖神”や“石地藏”などに近いものと考えられる。

東京家政大学研究紀要第39・40・42集野辺の民間信仰Ⅰ、Ⅱ、Ⅲにおいて、わが国の道祖神との比較検討、オーストリア、ドイツ、フランス（ブルターニュ地方）に点在するビルトシュトックやカルヴェールについての考察を進めてきた。

今回はフランス（ブルターニュを除く）全土の中から特にカルヴェールが数多く点在する地域を、ミシュラン1/20万地図から調査した結果「オーヴェルニュ」「中央山地」「メディ・ピレネー」「サントル」地域にしばり実

地踏査した。フランスにおけるカルヴェールの点在地域、材質、形態、年代など可能な限り調査し、引き続き考察を進めたい。

さらに、フランスの中央山地からスペインとの国境にあるピレネー山脈を越えて、聖地サンチャゴ・デ・コンポステーラ（Santiago de Compostela）へと向かう巡礼路には、カルヴァリオが点在する地盤があると考えられるので、このスペイン北部にも調査の輪を広げた。

この巡礼路の地域は、巡礼最盛期といわれる11世紀には、年間50万人以上の巡礼者たちが往来したといわれるので、カルヴァリオの点在状況、その形態や歴史的背景など調査するに値するものと考えた。巡礼路沿いの町や村には、ロマネスクから初期ゴシックの聖堂が数多く見ることがでる。路傍のカルヴェール・カルヴァリオと共に民間信仰の対象と考えられる、これらの聖堂や教会についても触れていきたい。

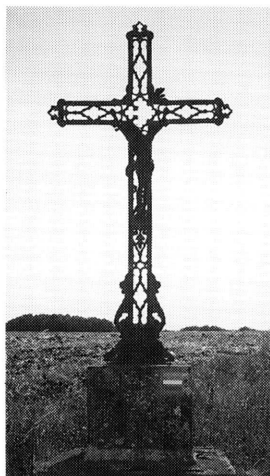
#### 2. 路傍のカルヴェール・カルヴァリオ

今回対象としたフランス・スペインの地域においては、他の諸国の場合と同様にカルヴェール・カルヴァリオの形態、材質、場所などを地域別に分類する。

##### (1) イル・ド・フランス（オーヴェール周辺）

パリの郊外、ヴァン・ゴッホが生涯を閉じた地として有名。国道N185から県道D928に入ったメリー（Mery）の辻に鉄製のカルヴェールを確認。その前には奇麗に花壇が設置されていた。ゴッホの“麦畑の絵”にある畑道には木製の2メートルあまりのもの、ガシェ医師の家の

近くには石造りのもの、道路番号もない農道には鉄製、石製などのものを数基確認。〔写真1・2〕



〔写真1〕

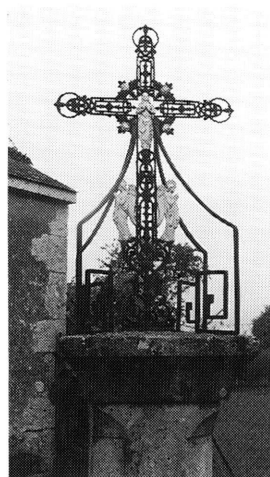


〔写真2〕

## （2）サントル（オルレアン・トゥール周辺）

オルレアン（Orleans）の北、県道D102沿いには、鉄製のものや大きな木製の十字架に木彫のキリスト像が架かるものなどが確認できた。また、オルレアンの南15キロほどの地点を東西に走る県道D19、D103、D921などの沿道の交差点や村の出入口に鉄製、木製でキリスト像のないものなど各種のものを取材することができた。

トゥール（Tours）の南東約30キロ地点のプロワ（Blois）の村周辺の農道の辻や村の出入口には、鉄製の大小さまざまなものが点在していた。その中央に柵植の小枝を飾り付けてあるものもあった。〔写真3・4〕



〔写真3〕



〔写真4〕

## （3）中央山地・オーヴェルニュ

この地域の調査は、千年以前からの巡礼者たちが、ル・ピュイ・アン・ヴァレー（Le Puy en Velay）を出発地点とするサンチャゴ・デ・コンポステーラに向かって歩いた巡礼路に沿っての踏査となった。

ロット川の曲流に沿って東へ県道D653を進む。町の出口に高い台座の上に立つ石製のカルヴェールが鎮座している。道はD653から分かれD662に入り、大きく蛇行するロット川に沿って進むとサン・ジュリー（St. Gery）の村の入口に鉄製の黒く塗られたものが立っていた。さらに進んで、サン・マルタン・ラブヴァル（St. Martin Labouval）村には、十字架像の左右にマリアと聖人の立像を配した巨大なものが建っていた。その先には石造りのものや鉄製のものを多数確認。たまたま立ち寄ったラ・ヴェンゼル（La Vinzelle）の村の路地には壁龕に納められた十字架や、マリア像、そのほか多数の鉄製のものが点在していた。

コンク（Conques）への分岐付近には、台座の壁龕にジャンヌ・ダルクらしい像が納められているものなどに出会う。コンクの出口の大きな木製のものは、台座に壁龕があるが中の像は失われていた。ロット川の流れと共に道も南東へと転じD920となる。エスタン（Estaing）の橋の中央に大きな鉄製のものが立っていた。

エスパリオン（Espalion）で道は川から離れD987となり北東へと進む。何処までも続く高原の真ただ中にオーブラック（Aubrac）の救護所があり、その前には苔むした台座にほっそりとした鉄製のカルヴェールが立つ。小高い丘の上には大きな白いマリア像が建ち、原野を見下ろしていた。D900との分岐には石製のガッシリしたもの、その先の石垣の上には素朴なキリスト像が刻まれた小型のものが、その周りには巡礼者たちが供えた小石が積み上げられていた。

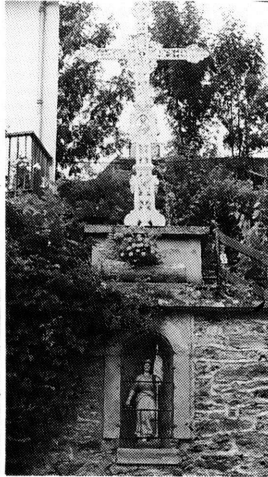
道はほぼ真東に進みD7、D5と変る。この沿道には鉄製石製など各種のものが点在していた。グランドリュ（Grandrieu）から北へ転じD985となる。D587との分岐には、大型の石造りの祠の中に木製の大きな十字架のある珍しいタイプのものを発見。さらにモニストール（Monistrol）には石造りの祠にマリア像が納められたタイプのものがあつた。ル・ピュイの入口には石造りの長い円柱のカルヴェールが建っていた。〔写真5・6〕

## （4）ミディ・ピレネー（オロロンからカルカッソンヌ）

ソンボルト峠を下る国道134沿線、ユルドス（Urdos）

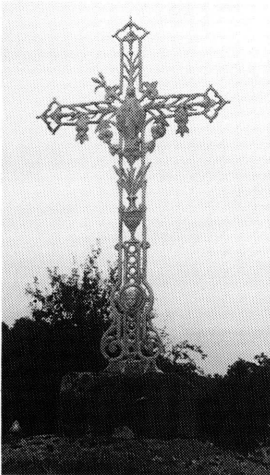


〔写真5〕



〔写真6〕

の出口には丸太の十字架にキリスト像のある大きなものがあった。さらに北上、ベデュス (Bedous) の村の辻に石造りの大きなものが建っていた。道は東へと転じD918に入り、アリュディ (Arudy) への分岐に鉄製の白いカルヴェールが光っていた。イゼス (Izeste) の村の出口には、草に覆われた祠に真っ白いマリア像。レストル・ベタラン (Lestelle-Betharram) 村の出入口にも鉄製、石製などを確認。その先はフランスの聖地ルールド ( Lourdes) である。この町の随所に聖人像やカルヴェールを見ることができた。



〔写真7〕

鉄製と石製のものが見られた。

カルカッソンヌ (Carcassonne) へ向かう途中のサン・ゴードン (St.Gaudens) の入口には、大きな祠の中にヤコブ像が納められたものが建っていた。さらに進んでD622沿線のオートゥリーヴ (Auterive) には、金色の後

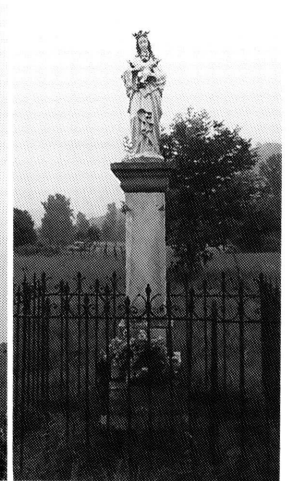
光の付いている鉄製のもの。ネルー (Nailloux) の村の辻には、巨大な台座のものなどを確認した。カルカッソンヌの出入口に鉄製と石製を確認。〔写真7・8・9〕

#### (5) サンチャゴ・デ・コンポステラ周辺

スペインの北西部に位置する、巡礼者たちの目的地である聖地。その旧市街の入口に、彫刻が施された巨大なカルヴェリオがそそり立つ。旧市街を出た大通りの分岐



〔写真8〕



〔写真9〕

に石造りの4段の台座のある背の高いものを発見。素朴なキリスト像と台座には、巡礼者の必携品のホタテ貝と瓢箪が刻まれていた。カルヴェリオが道標の役割を果たしている好例である。

国道N550を南下してポンテヴェドラ (Pontevedra) からG41に入ったところに大きな祠型と十字架型が一体となったものを発見。さらに進みポイオ (Poio) の村の入口の人家の庭先に背の高い石造りのものを確認。その石柱には杖を持ったヤコブ像が刻まれていた。5キロほど先の小さな漁港コンバーロ (Combarro) の込み入った路地には、屋根に十字架を付けた高床式穀物倉庫とともに数多くの石製のカルヴェリオを見ることができた。

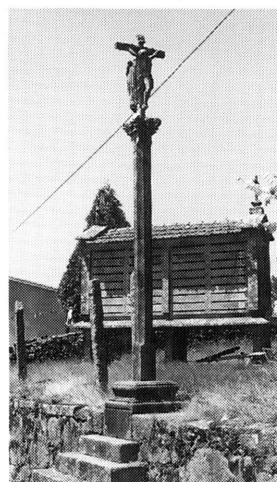
ポンテベドラ湾を隔てたモラソ半島の先端のイオ (Hio) 村には、ふんだんに彫刻が施された豪華なカルヴェリオが建っている。パドロン (padron) から西へAC301を行く。ロイス (Rois) 村の広場に十字架の下に顔が彫られ、石柱に巡礼らしい人物が彫られたものもあった。山道を上りきったアグアサントス (Aguasantas) 郵便局前的高みに、灯籠型に似た風化した石製のもの。さらにノイア (Noia) から最西端のフィニステレ (Finisterre) へ通じるC550へと入る。ノイアの村外れに



〔写真10〕



〔写真11〕



〔写真12〕

は、高床式穀物倉庫と並んで古びた石製のもの、さらに進んだムオス (Muos) の入口に十字架から降ろされるキリスト像を刻んであるカルヴァリオ。そしてフィニステレを遥かに望むリラ (Lira) 村の墓地の一角に、丸太状の柱にヤコブ像のある巨大なカルヴァリオを見ることができた。この村にはガルシア地方最大の巨大な高床式穀物倉庫があった。

〔写真10・11・12〕

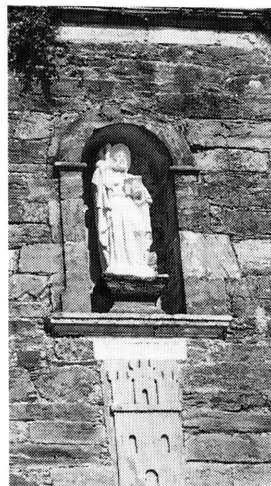
#### 〔6〕 スペイン巡礼路に沿って(その1)

サンチャゴから国道N634を東へと、巡礼者とは逆行するコースで踏査する。

N547を50キロ進んだ、ボエンテ (Boente) の村外れの分岐の水飲み場風の噴水の横に、3メートルほどの石製のものが建っていた。この辺りには随所に貝のマークの道標が目止まる。パラス・デ・レイ (Palas de Rei) から北東のC535に入る。ポルトマリン (Portomarin) の村に立ち寄ると、中央広場には大きなヤコブ像がサンチャゴの方向を指差し鎮座していた。起伏の激しい山道となり、さらに進むとトリアカステラ (Triacastela) の村である。この村の広場にも4メートルほどの台座の上に大きな帽子のヤコブ像が、そして村の教会の壁龕にもヤコブ像が祭られていた。巡礼路の難所の一つセブレ

イロ越えのサン・ロック高みに巨大な巡礼者の像が建っていた。

ボンフェラーダ (Ponferrada) を過ぎ道はLE142と変わり、エル・ゴンソ (El Gonso) の村の入口に、三段の台座の上に木製のものを発見。アストルガ (Astorga) の出口に石製のものがあった。レオン (Leon) の旧サン・マルコス修道院 (現在は国営のパラドール) の前には白い石製のカルヴァリオの台座に座る巡礼者のブロンズ像が印象的であった。〔写真13・14〕



〔写真13〕



〔写真14〕

#### 〔7〕 スペイン巡礼路に沿って(その2)

レオンを出ると、N601はA231の高速道路と合流して東へと進む。カリオン・デ・ロス・コンデス (Carrion de los Condes) でN120となり、町の出口に台座にホタテ貝が刻まれた、真っ白なカルヴァリオが建っていた。パディラ・デ・アバホ (Padella de Abajo) の入口には2基の石製のものが並んでいた。10キロほど先のオルミョス・デ・ササモン (Olmillos de Sasamon) の村の分岐には石製で円柱の背が高く、ふっくらとしたものが建っていた。タルダホス (Tardajos) 村の出口にも円柱のものがあつた。

ブルゴス (Burgos) から国道N1を南下して、BU903を東に進んでサント・ドミンゴ・デ・シロス (Sto. Domingo de Silos) の村には、石製の大きな台座の上に小さな鉄製の十字架を載せたものが2基あり、また、丘の上のマリア像への参道に沿って、石製のものが等間隔に建てられ、道標になっていた。

これより北へ転じ、N254とC113の分岐に石製で円柱がふっくらとしたものを確認。山道を進み、途中祠型の



ものなどを確認した。プエンテ・ラ・レイナ (Puente la Reina) の二つの巡礼路の合流点 (イバニェタ峠からの道とソンプルト峠からの道) には、立派なブロンズの現代風のヤコブ像が建っていた。

N111は北へと進み、アストライン (Astrain) 村の入口に、幅広の高い角柱の上に縦横の長さが同じ十字架が載ったカルヴァリオが建っていた。パンブローナ (Pamplona) からイバニェタ峠を目指しN135を北上。メズキリツ (Mezkiritz) の集落の道端に、花に飾られたマリアの石碑。ロンセスヴァイエス (Roncesvalles) の村の入口には、苔むした石製のものがあつた。峠直下の水場には純白のマリア像が光っていた。イバニェタ峠の頂には、小さな礼拝堂横の塚には、巡礼達成を祈願して巡礼者たちが供えた、手作りの小さな十字架が立てられ小山をつくっていた。

もう一つのピレネー越えの峠 (ソンプルト) を目指してNA172を南下。N240を横断してNA127に入るとサングエサ (Sanguesa)。フランシスコ・ザビエルが生まれ育ったザビエル城への田舎道沿いには、等間隔で道の左



〔写真15〕

右に15基のカルヴァリオが建てられていた。その中に一つの台座に3基並んでいるものもあつた。

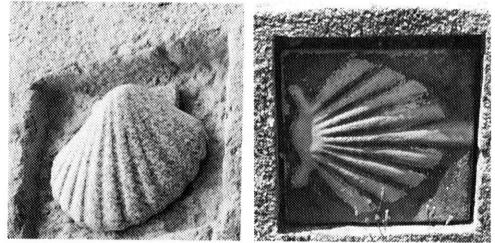
国道N240に戻り東へ進み、ハカ (Jaca) で転じてN330は北へと登る。峠直下のカンダンチュ (Candanchu) の村の人家の壁龕にマリア像が描かれたものを発見。スペインとフランスをつなぐメインルート、ソンプルト峠には、大きなドーム状の祠と金属製の現



〔写真16〕

代風の巡礼者像が建っていた。〔写真15.16〕

スペインでは、ほぼ巡礼路に沿ったかたちをとったが、予想外に十字架像の形態を示すものは少なかった。しかし、巡礼者用の道標は同じシンボルマークを用い解りやすく、随所に設置されていた。〔写真17〕



〔写真17〕

今回の広範囲な地域の実地踏査の割りには、取材できたカルヴェール・カルヴァリオの数は約150基あまりと少なかったが、その種類の豊富なことは大変興深い。

### 3. 古寺のファサードに見られる彫刻群

調査地域の町や村には、必ず聖堂や教会が建っている。それらはロマネスクや初期ゴシック様式をもったものである。

東京家政大学研究紀要第42集野辺の民間信仰Ⅲに記載したブルターニュ地方で見られた“教会囲い地”内にあつた巨大カルヴェールは、中央にキリストの磔刑像を配し、周囲には聖書の諸場面を表わす彫刻群を設置し、庶民に対する視覚による一種の布教を目的としていたと考えられたものであつた。それらの彫刻群は一体一体非常に芸術性に優れていた。

今回訪ねた聖堂の前に佇ずんだとき、まず視覚に訴えてくるファサード (建築の主要な前面または正面の全面壁) の存在感は、ブルターニュの巨大カルヴェール同様か、それ以上に重厚さが伝わってくるものであつた。

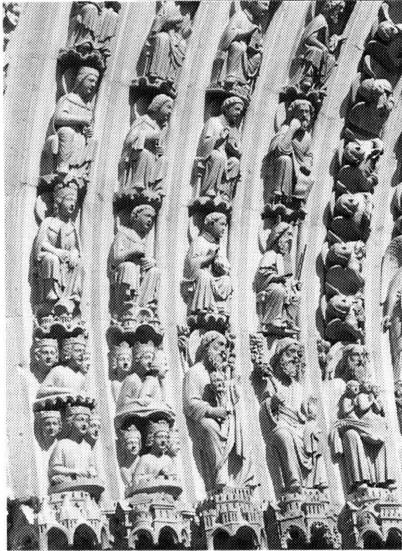
独立した巨大カルヴェールと聖堂のファサードとは、立体と平面との違いはあるが、視覚に訴えた一種の布教活動を表わしている《聖書の役割をする建築物》と感じたのである。

#### (1) フランス

##### A. バリ・ノートル・ダム大聖堂 (パリ・Paris)

空に69メートルにも達する正方形の二つの塔が突き出し、三層をなしてそびえる正面ファサード。三つの扉口の中央が〈最後の審判〉向かって左が〈聖母マリア〉右が〈聖アンナ〉の扉口である。中央の大バラ窓、その下

にずらりと居並ぶユダとイスラエルの28人の王、聖人像を飾り、まぐさ（扉口の上に水平にかけ渡す部材）、扉口の上部半円形のタンパン、その上のアーチ型ヴシュールにもぎっしりと彫刻を施してある。〔写真18〕



〔写真18〕

#### B. ノートル・ダム・ラ・グランド教会 (ポアチエ・Poitiers)

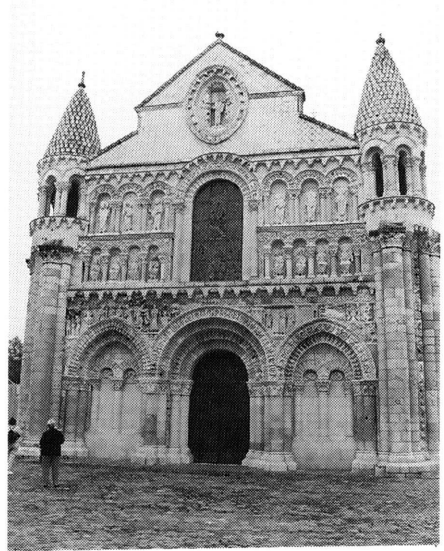
1140年に建造された典型的なポワチエ・ロマネスク教会である。正面入口の三つの扉口の上は、左から〈アダムとイヴ〉〈四人の予言者〉〈受胎告知〉〈イザヤの樹〉〈エリザベート訪問〉〈誕生〉〈洗礼〉〈ヨセフの瞑想〉と続き、次の上段は使徒たち、もう一つ上には、聖チレールとマルタンが並ぶ。最上段には〈荘厳のキリスト〉が置かれ、全てがそこに収められているのである。〔写真19〕

#### C. サン・ピエール大聖堂 (アングレーム・Angoulême)

大部分は新教徒によって破壊されたが、1634年に修復された。ファサードには、創建当時の彫像が相当残っている。典型的なアングレーム様式が見られる。タンパンには、〈キリスト昇天〉と〈キリスト再臨〉が描かれている。彫像や浅浮彫の70人の人物像や、武勲詩「ローランの歌」に述べられた戦闘場面もある。〔写真20〕

#### D. サント・フォア聖堂(コンク・Conques)

11世紀に再建されたこの聖堂は、川沿いの斜面にあり土地の色と似た赤褐色をしている。方形の二つの塔にはさまれたファサード(西側)は、オーヴェルニュ・ロマネスク彫刻の傑作である。完全な形で保存されているの



〔写真19〕



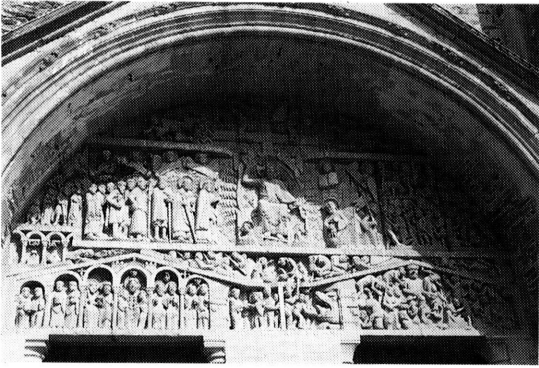
〔写真20〕

は、革命下心ある村人たちのおかげとか。三層からなるタンパンは〈最後の審判〉を表わしている。中央のキリストの手の動きや、他の人物の姿勢や表情、波模様の表現には斬新さが見られる。向かって左側の細長く三角形となった枠内に、神に向かって幼い聖女フォアのあどけない面差しと、右手をもって神を表し、その手を彼女に差しだしている情景は、美しく多くを語っている。

〔写真21〕

#### E. サン・セルナン聖堂(トゥールーズ・Toulouse)

サンチャゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路の主要な



〔写真21〕

聖堂で、彼の地の大聖堂を模して12世紀に建造された。

この地では、建築用の石材がほとんど採取できなかったため、建物の大部分に地元で産出された桃色のレンガを使用している。そのため、全体が赤みを帯びているのが特徴である。ファサード（東側）に見られる〈キリスト昇天〉は、キリストが二人の天使によって腰と足を支えられて、地上から離れようとしている。その場面は動きがよく表現されている。また、手に聖書を持ったがっしりとした聖ヤコブの立像があり、光輪にはヤコブの名が刻まれ、聖ペテロ像も見られる。

聖地の大聖堂やレオンのサン・イシドロ聖堂に共通の図柄、技法が見られるのは、巡礼路往来の密度が高かったといえる。

## （2）スペイン

### A. サンチャゴ聖堂

#### （ブエンテ・ラ・レイナ・Puente la Reina）

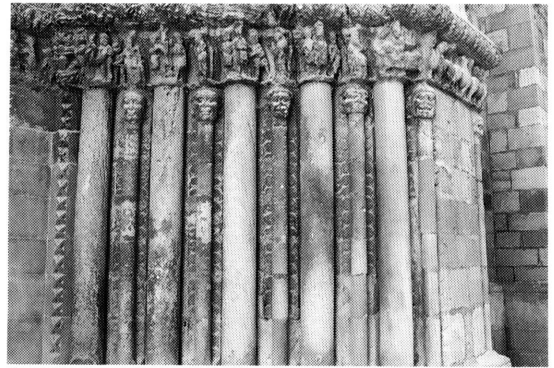
ピレネー山脈を越えた二つの巡礼路がここで合流し、サンチャゴ・デ・コンポステーラへと辿るのである。人口2,000人足らずの町だが、サンチャゴ聖堂とレル・クルシフォホ教会がある。

ここで注目したいのが、サンチャゴ聖堂の扉口の構成とアーチの形である。そこには晒し首のような人間の頭部が10体並べられている。それらは、しかめ面をしていて怖い表情である。前回のフランスのブルターニュ地方で、ケルト民族の歴史にふれた一つに“首”を取り上げたのに関連があるようだ。ケルト民族の伝統の中に、人の頭部に宿る魂の信仰がここでも見られた。〔写真22〕

### B. サンタ・マリア・ラ・レアル聖堂

#### （サングエサ・Sanguesa）

この聖堂は、車の往来の多い通りに面し、アラゴン川を背に建っている。八角形の大きな塔が、人々を威圧す



〔写真22〕

るかのようにそびえている。建造は、12世紀末に始まり13世紀中頃に完成されたので、時代はすでにロマネスクに続くゴシック時代に入っている。

大通りに面した南側ファサードが、強い日差しをうけて深い陰影を投げかけている。タンパンの主題は〈最後の審判〉である。中央に座るキリストは、この世の終末時に審判を下している。入口両側には、人像円柱が左右6人づつ十二使徒の立像が表現されている。どの人物も、円柱の垂直線に従い真直ぐに伸び、細長いプロポーションになっている。しかし、円柱という立体のなかに彫り刻まれているので初期のロマネスク彫刻にはなかった現実的な量感を感じさせる。それは次のゴシック彫刻の特徴の一つになっている。背後の円柱という“枠組み”から完全に独立像になっていく過程がこのファサードに見られる。〔写真23〕

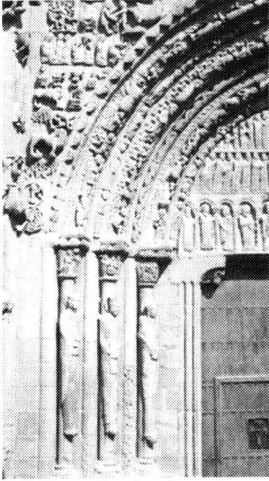
### C. サン・ミゲル聖堂（エステーラ・Estelka）

12世紀建造のこの聖堂は、小高い丘にあり、狭い路地を深い入口に向かって石段を登って行く。人を胎内に吸い込むような構造になっていて、北側にある三つのアーチのある重々しい扉口に導く。中央アーチを潜ると、屋根付の柱廊扉口のあるファサードには、サングエサと同様一面びしりと彫刻が施されている。彫刻全体は浮き彫りというより、高浮き彫りになり、比較的ずんぐりしたプロポーションをとっているが力強さを持っている。柱頭部分は〈受胎告知〉からはじまっている。

巡礼路を通じて入ってきたフランスの要素が、スペイン的な過剰な装飾精神と混じり合い、サン・ミゲル聖堂独自の世界を生み出しているのである。〔写真24〕

### D. サンタ・マリア・デ・レグラ聖堂（レオン・Leon）

スペイン・ゴシック三大聖堂の一つで13～14世紀の建造である。西側正面と南側ファサードは特に素晴らしい。



〔写真23〕



〔写真24〕

西正面中央扉口のタンパンは〈最後の審判〉である。惜しげもなく彫刻を施して、天を目指すゴシックの理念が見事に実現されている。堂内の比類のない美しさは言語に絶するあまりである。この豪華さは、高さ12メートルの位置に並んだ120枚以上のステンドグラスと三つの巨大なバラ窓に負うところが大きい。〔写真25〕

#### E. サン・イシドロ教会（レオン）

こじんまりとした南外陣扉口にあるタンパンの彫刻は、三枚のパネルで構成されていて中央のものが〈十字架降下〉向かって左は〈キリストの墓を訪れる女たち〉右手が〈キリスト昇天〉を表わしているが、全体に共通するやわらかな不思議な優しさがにじみ味わいは比類ないのである。

たとえば、ゴシックの〈十字架降下〉に見られる悲痛感はどこにはない。キリストはまるで眠っているようだし、マリアの悲しみの表情にしても、今にも気を失って倒れかかるといったふうのものではない。

#### F. サンチャゴ・デ・コンポステラ大聖堂

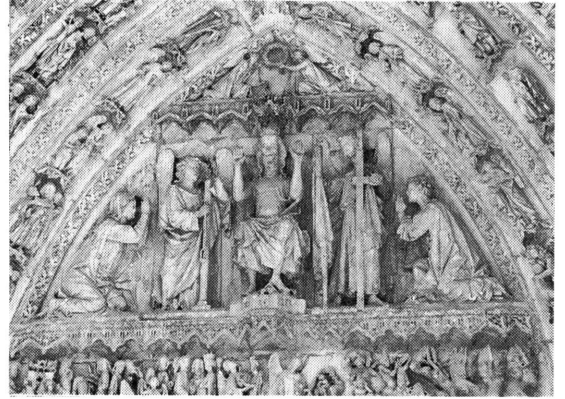
（サンチャゴ・デ・コンポステラ・

Santiago de compostela）

ピレネー山脈からも800キロ、巡礼者たちにとってやっと辿り着いた聖都である。

初期ロマネスク建築の集大成ともいえる大聖堂は、9世紀初頭、ここで聖ヤコブ（スペイン語でサンチャゴ）の遺骨が発見され、その上に教会が建てられたと伝えられる。

この大聖堂は、スペイン・ロマネスク彫刻を代表するファサードの彫刻群をもっている。南側袖廊の扉口は、



〔写真25〕

“金銀細工師の門”といわれている。この扉口は一對になっていて、左右二つのタンパンとその上部にはところ狭しと〈キリスト受難〉が彫り刻まれている。

広場から菱形の階段を登り、西正面のオブラドイロ門を潜ると入口が三つに分かれた“栄光の門”が現れる。12世紀初めマテオが20年かけて彫った200を越える像のあるロマネスク彫刻の傑作で、神の栄光を称えるテーマで構成されている。中央の柱には、守護聖人ヤコブが左手に巡礼杖を持って座している。この彫像には彩色が残り、衣の襷の自由な表現、個々の強烈な顔の表現などが実に見事である。人物たちの体の動きも感じられる。背後の柱から像がはみ出して、より立体に近づいているのはロマネスクから次のゴシックへ一歩踏み出しいる証拠である。

#### 4. 巡礼路聖堂について〔地図1〕

中世には三大聖地の一つ、スペイン北西部に位置するサンチャゴ・デ・コンポステラへ、ヨーロッパ各地から巡礼路が延びていた。

フランスとスペイン国境の険しいピレネー山脈を越えて、スペイン領に入ってからでも、その道のりは800キロ余りの困難な道であった。

フランスからピレネー山脈を越すルートは幾筋もあり第1 アルル→トゥールーズ→ソンボルト峠

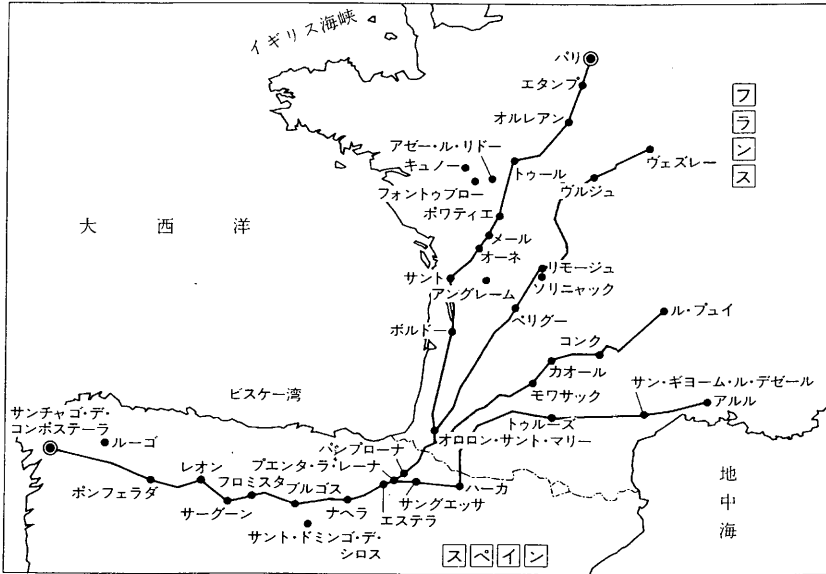
第2 ル・ピュイ→コンク→オスタバ→イバニエッタ峠

第3 ヴェズレー→リモージュ→イバニエッタ峠

第4 パリ→トゥール・ボアチエ→イバニエッタ峠

と大別できる。

イバニエッタ峠ルートはパンプローナを經由、ソンボルト峠ルートはハカを經由して、プエンテ・ラ・レイナ



サンチャゴ巡礼路と主な巡礼地

「ヨーロッパ古寺巡礼」平凡社より転写

〔地図1〕

の町入口で合流する。一つのルートに統合されて、エステラ、ブルゴス、レオン、トリアカステラなどの町を経て、聖地サンチャゴ・デ・コンポステーラへと巡礼者たちは歩き続けたのである。

9世紀初頭、サンチャゴ・デ・コンポステーラで聖ヤコブの墓が発見されて以来、聖ヤコブ信仰は、スペイン全土のキリスト教徒に広まった。

イベリア半島のイスラム勢力に対するレコンキスタ（国土回復運動）の精神的な支柱となり、歴代国王により保護されていた。11世紀になってからは、聖地も長い巡礼路も整備され救護院、宿場などが巡礼者を迎えた。

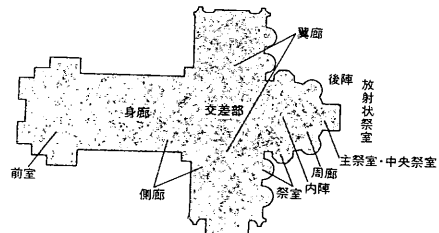
スペインのみならず、他のヨーロッパ諸国からも、大勢の巡礼者が聖地を訪れ、その総数は年間50万人をも越える勢いであった。

この巡礼路は、交通の幹線として大変重要な意味を持ち、特に聖遺物崇拝や聖堂や教会の建築ブームを起こし、ロマネスク美術の技術、様式、キリスト教図像学などの伝播に重要な役割を果たすことになった。さらにその聖堂や教会を中心に都市文化が築かれた。巡礼路に沿ったロマネスク聖堂は、建築的および彫刻的にみて、いくつかの共通の特色がみられる。

その一つは、石を積み上げた壁は厚く、窓は小さく、天井は丸いヴォルトで覆われている。タンパンや回廊の柱頭やファサードなどに壮麗な彫刻群が施されている。

ファサードには旧約聖書を中心とした信仰の世界と生活感のある場面も表現されている。

その二つ目は、聖地サンチャゴ・デ・コンポステーラ大聖堂を基本型とする、いずれも巡礼の大群衆を受け入れるため、巡礼者たちに便利のように特別な様式で造られている。その最も大きな特徴は、身廊だけでなく翼廊にも側廊をつけ、内陣後方に側廊とつながるように周廊をめぐるして、堂内をぐるりと一巡できる周歩廊をつかったことである。さらに、周歩廊は放射状祭室をもち、袖廊も小祭室を備えている。出口と入口は、別々につくられている。これは参拝路を一方通行にして殺到する巡礼者たちがぶつかりあって混乱することもないわけである。数多く設けた祭室には、巡礼者たちの参拝の対象である聖遺物（聖者の持ち物、遺骨の一部）を多数所持してい



「ヨーロッパ古寺巡礼」平凡社より転写

〔図1〕



たので、それを祭るための場所なのである。巡礼者たちは、聖堂内の参拝路に沿ってひとつひとつ順番に詣でたのであろう。〔図1〕

## 5. まとめ

フランス各地からピレネー山脈を越え、聖地サンチャゴ・デ・コンポステーラを目指した巡礼路沿いには、今なお中世のままの風景と独特の文化に触れることができる。

今回の調査では、カルヴェール、カルヴァリオは約150基あまりを確認し、取材することが出来た。設置場所は各国で見られたものと同様、町や村の出入口や辻、分岐、橋の中央などのほか、同じ形のカルヴァリオを等間隔に設置し、丘の上の修道院や地域の聖地への道標としているものもあった。

フランスのサントル、中央山地などには、鉄製のカルヴェールが多く、その十字架に付帯するキリスト像やマリア像には白色や銀色に彩色が施され、その強烈なコントラストが印象的であった。また、鉄製の十字架に柘植の小枝を飾りつけたり、台座の周囲を花々で飾るなど、人々の日常生活との関連が如実に現れていた。

さらに、スペイン北西部の海岸地域には、オレオス(Horreos)と呼ばれ、屋根の左右の切妻に十字架が掲げられている高床式穀物倉庫が立ち並んでいた。この十字架が邪悪な害虫から、大切な穀物類を守ってくれるものと、カルヴァリオと同様、庶民の信仰の現れと捉えた。これらは、ほんの一坪ほどのものから、長さ5~60メートルもある超大型のものもあり、重要文化財の指定を受けているものもあった。

一般に路傍に見られたカルヴェール、カルヴァリオは、素朴なものが多いが、聖地サンチャゴ・デ・コンポステーラ付近では、巨大で豪華な彫刻が施されたものも確認できた。スペインの巡礼路沿のものには、その台座や石柱に巡礼のシンボルマークのホタテ貝や瓢箪、巡礼者の姿などが刻まれ、巡礼者たちへの道標としての役割を果たしたと考えられる。

中世から巡礼路という歴史をもつこの「道」は、11世紀後半、レコンキスタにともなってロマネスク様式が盛んとなり、聖堂を飾る装飾芸術としても発達し、回廊の柱頭やファサードなどに壮麗な彫刻が施され、堅固で充実した力と美しさを見る者に与えた。

特に3章で、古寺のファサードを取り上げるべく、広

い地域を調査した、全ての聖堂を列記したいところだが、特に印象の強かったフランスの5カ所、スペインの6カ所を取り上げた。

ファサードは、その地に辿り着いた巡礼者たちが、聖堂の前に先ず立ち止まった時、最初に視覚に迫ってくるのである。そのファサードには、タンパン、グシュール、さらに壁面を何段にも分けてキリストの生涯の物語を彫刻で書き間なく、びっしりと一面に装飾が施されているのである。あるいは柱頭や柱身までありとあらゆるところの空間を、積極的に活用していることに驚嘆を覚えた。

これらファサードは、信仰の世界で埋め尽くされているが、その中にある珍しい二つの主題に、注目して次に記す。

スペインのプエンテ・ラ・レイナにあるサンチャゴ聖堂で注目し、入口近くの五層になった半円アーチを受けている左右5本づつの小円柱の頂上部に彫られていた晒し首であるかのような人間の頭部である。10体並べられていて、その顔はしかめ面をした怖い顔である。これはケルト民族の伝統の中に、人間の頭部に宿る魂の信仰の現れに通じるものであろう。

もう一つは、スペインのハカ大聖堂やサンタ・クルス・デ・ラ・セロス聖堂の西正面扉口のタンパンには、その半円の中央に大きな円があり、その左右に二匹のライオンが向かい合った構図で表現されている。この大きな円は、中心から8本の輻(や)が出ているのだが、X・P・Iと三つの頭文字で成り立っているように見える。さらにIの文字には $\alpha$ と $\omega$ が付け加えられている。フランスの聖堂では、見られない非常に珍しい主題であった。ライオンやX・P・I・ $\alpha$ ・ $\omega$ は、キリストを象徴化したものであろうか。これについては次の課題にしたい。

## 6. 結 び

現在のサンチャゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路には、様々な国からやってきた大きなザックを背にした若者たちの姿を目にする。この巡礼者たちは、宗教的動機で長い道のりを旅する者や、精神的なものを求め歩く人々、ロマネスク芸術探索の人々、スポーツ感覚で旅する人々、など各自各様の目的を持っていると考えられる。また、子供連れのファミリー巡礼などその層の広さにも驚嘆を覚えた。

異なる言語、個々の日程の違い、体力の違いなどがあ

でも、聖地サンチャゴ・デ・コンポステーラを目指すという同じ目的意識のもとに繋がり、旅をともに続けている。そして、この旅で大きな成果を獲得して、各々の日常に戻って行くのである。

巡礼路という「道」をひたすら歩くことで、自分にとって本当に必要なものを知らされることになる。まず物に溢れた日常から移動に必要なだけの物を選ぶ作業が求められる。捨てること、選ぶこと、それが旅の始まりである。

巡礼とは、本来宗教的情熱にかられ、自分の財産を捨て、罪の浄化を求め、魂の救済を求めて聖地に赴く行為である。

しかし敬虔なキリスト教徒でもなく、アジアのはずれから出向き、調査を進めてきたが、現在の巡礼者たちの姿に触れたこと、数多くのロマネスク芸術に出会ったことが今回の調査活動に大きな成果をもたらした。

しかしながら、この調査活動で訪れた数多くの聖堂や教会は、そこで生活している人々にとって、日常の祈りの場所であり、大切な空間であることを痛感させられた。

カルヴェール、カルヴァルオは、道の分岐や村の辻などに、巡礼者たちの安全や目的達成を祈願して建てられていたが、特にスペインでは、道路標識のように堂々と建っていて、巡礼者たちを優しく見下ろしているかのように感じられた。そこには、巡礼のシンボルマークのホタテ貝を、デザイン化した黄色の印が目立った。

巡礼路沿いのロマネスク聖堂は、ファサードをはじめ多くの空間を彫刻で埋めつくされている。これは聖書の

物語を具体的に彫刻して、当時の文盲の人々に対する聖書の世界を知らしめる大きな役割を果たしていた。ロマネスクの超越的ともいえる力は、誰の心にも強い衝撃を与え、宗教に縁のない人々に対しても、何かを語りかける力を持っている、すぐれた芸術といわざるを得ない。また、この調査活動で出会った多くの聖堂や教会は、一つの様式にとどまらず、各地方ごとの特徴を持っていたことは、ロマネスク芸術をより面白く、より魅力的にしているのである。

それぞれの地域の自然と調和しながら、美を実現している。ロマネスク聖堂を取り巻く環境は、心の安らぎと、人間的な空間を与えている。

#### 参考文献

- 1) レーモン・ウルセル「中世の巡礼者たち」1987  
ミスズ書房
- 2) 渡辺昌美「巡礼の道」1980 中公新書566
- 3) 馬杉宗夫「スペインの光と影」1992  
日本経済新聞社
- 4) 田辺 保「フランス巡礼の旅」2000 朝日選書659
- 5) 饗庭孝男「ヨーロッパ古寺巡礼」1995 新潮社
- 6) 米山智美「スペイン巡礼の道を行く」2002  
東京書籍
- 7) 小谷 明・栗津則雄「スペイン巡礼の道」1998  
とんぼの本・新潮社
- 8) 小川国夫「ヨーロッパ古寺巡礼」1976 平凡社

#### Summary

I did practical survey to search the Calvaire and Calvario.  
I took along the pilgrim road starting from the mountainous region of central France and crossed the Pyrenees and ended at the Santiago de Compostila.  
I could search more than 150 Calvaires and Calvarios. They had a large variety of shapes and the quality of materials.

Along the pilgrim road, there were many Calvaires which had St. Jacobus, scallops or gourd those are the symbol of pilgrim.  
And also, the sanctuaries along the pilgrim road are the treasure of Romanesque art.